

女子栄養大 \* 東京都老人研 ○柳沢幸江 \* 永井晴美 安原安代

【目的】高齢者のQOL (Quality of life)が望まれる中、食物をおいしく食べ続けることは、生活のQOLを高めるために必須の条件である。食物のおいしさの主要因であるテクスチャは主に咀嚼活動に伴って認知されるため、咀嚼機能の変化によって認知状態が変わることが考えられる。そこで本研究は、テクスチャの中で特にかたさの認知が、年齢や口腔状態によってどの様に変化するかを、かたさイメージ調査によって検討した。

【方法】調査は1989年6月に東京都老人総合研究所と婦恋村による総合健康調査にて実施した。対象は、40歳以上・80歳未満の受診者464名(男子209名、女子255名)。かたさイメージは、物性の異なる33品目の食物について、柔らかい・普通・硬いの3段階で聞き取り調査した。口腔状態調査は、歯牙状態およびかむ能力を聞き取り調査した。

【結果および考察】口腔状態は年齢が高くなるに従って、部分義歯・総義歯者が多くなり、65歳以上では、49.0%以上の者が総義歯であった。かめない食物があると答えた者は義歯者に多く、かたさの大きい食物ほどかめない者が多かった。一方、全て自分の歯の者は、高齢者であってもかめない食物はほとんどなかった。

食物のかたさイメージは、口腔状態によって異なり、義歯者はそうでない者に比べて、食物をかたく評価した。このことは、ふつうのかたさ以上の食物で顕著であった。一方、口腔状態が同じであれば、年齢によるかたさイメージの変化は認められなかった。以上の結果から、加齢に伴い義歯装着などによって口腔機能が低下した場合は、摂食時の食物のかたさ評価が変化することが示唆された。